



子どもたちの
可能性を信じ、
すべての子どもたちに
公平な機会を

第7回目は、児童養護施設退所予定者の就労支援を行う「株式会社フェアスタート」の設立準備中の永岡鉄平さんです。「教育」の分野で社会に貢献したいと起業を思い立って会社を辞めた後、現在に至るまでに経験したのは、農業、お寺通い、子育て支援拠点と児童養護施設のボランティア。これらの経験から現在準備中の事業に行き着くまでと、起業を決意するに至ったその思いを伺いました。

◆ 「社会へ出たくない若者」を生み出す教育への疑問

大学在学中から漠然と“起業”を意識していたものの、当時はまだ具体的なプランを持っていなかつた、フェアスタート代表の永岡鉄平さん。「まずは法人営業の勉強を」とリクルートへ入社し、希望通り求人広告の法人営業の仕事へ。数年後には学生の就活支援に携わるようになりましたが、そこで目にしたのは、社会に出たがらない所謂“モラトリアム”的な若者たち。

「早く社会に出たいと思って就職したので、その気持ちが、正直に言って、理解できませんでした。」

その後も学生と関わっていくうちに、教育、特に人間・社会教育に問題があるのではないかと考えるようになり、教育の分野で社会に貢献したいという気持ちが強くなっていたそうです。

◆ 「教育」を学びに、畑へ、お寺へ、子育ての現場へ

そんな気持ちを抱いて退職した後、最初に行ったのは、畑とお寺。住まいのある泉区で農地を貸し出す事業が行われており、リタイアされた年長の方々とともに半年間土いじり。そこで感じたのは、農業では「もったいない」という感覚をとても大切にしていることと、生命の力強さ。またお寺では、円覚寺の足立老師のもとへ通う中で、人は「生きている」のではなく「生かされている」ということ、感

謝の気持ちを持つことがとても大切であると、強く感じるようになったそう。これらを子どもたちに伝えたいという思いから、今度は幼稚期の教育を学びに、ボランティアで子育て支援拠点へ。子育て中のお母さんたちと話をする中で、「子育てにおいて最も大事なことは何か」を考えた末に至った結論は、「0～6歳の間に親から愛情を与えられること」でした。

この一見当たり前とも思える愛情を与えられていないのが、児童養護施設の子どもたち。かつての孤児院のイメージと違い、親との死別ではなく、親の病気や虐待などにより施設で暮らしている子どもがほとんどで、施設の子どもの6割は虐待を受けたことがあるとされています。「そういった子どもたちのために仕事をしたい」という思いを胸に、永岡さんの起業への道は大きく前進していくこととなります。

◆見えない就職という“出口”と、感じた子どもたちの“可能性”

早速始めた児童養護施設でのボランティアや、施設を支援するNPOへ通って見えてきた課題は“就労支援”。法律上、施設の子どもたちは18歳になると退所する必要がありますが、奨学金のあとが無い限り進学は難しく、多くの子どもたちは就職の道を選ばざるを得ません。子どもたちの自立支援も施設の役割の一つですが、職員は日々の生活支援で精一杯で就職支援まで手が回らないのが現状だとか。

「どんな仕事があるか、仕事とは何なのかもよくわからない中で、住む場所と働く場所を同時に得なければならず、この条件を満たす職業を優先的に選びがちです。向き不向きによらず就職する可能性が高いため、早期退職に繋がりやすいのです。退所者の4割はホームレスになり、暴力団や水商売の道へ進む子どもも少なくなく、貧困の連鎖が起こりがちです。退所時の、最初の就職がカギになっています。」

一方で施設の子どもたちに強く可能性を感じたそうで、

「とても元気で、コミュニケーション能力も高い。営業向きの子も多いですよ。これはやはり集団生活の賜物ですね。また入所者の2割は障がい者で、特に就職が難しいですが、彼らと一緒に作業をした時感じたのは、仕事が非常に丁寧で、働き振りも真面目なので、就職先は必ず見つかると確信しました。」

◆入所中、就職活動、退所後のすべてでサポート

思い描いていた就職サポートは、施設入所中から就職活動、そして退所後までを含めた一貫したサポート。入所中は、インターンシップやスキルアップ（付加価値）教育の他、虐待を受けたことのある子どもの中には、自己肯定ができない子どもが多いため、考えを前向きにしていくよう、施設出身者によるトークイベントなども実施していきたいとのこと。また、こんなユニークな試みも。

「興味のないことには一切興味を示さない、正直手強い子どもたちも多いので、企業の新卒採用担当者が、自社に興味を示してもらえるように子どもたちにPRする研修プログラムも考えています。子どもたちにとっては、どんな仕事があるのかを知る機会にもなりますしね。」

就職後のアフターフォローでは、職場への定着支援や、寂しさを感じさせないように施設の仲間や一般社会人も含めた交流会も考えているそうです。

永岡さんの得意分野とも言える、就職活動時の企業とのマッチングは、すでに案件がいくつか進んでいます。子どもたちを受け入れてくれる企業の多くが中小



企業。最近マッチングが実際に決まった企業も、先代が昭和30年代に設立した製造業を営む企業で、伝えていくべき高い技術がありながら後継となる技術者が見つからないという課題を抱えていました。

「大手を本命として考えている大卒者に、“選択肢の一つ”程度の意欲で就職されるより、大学卒の学歴は無くとも、意欲のある長続きする人を採用したいと考えている企業は多いです。」

入所中の子どもたちの多くが普通の就職を諦めている中で、採ってもらえる企業があるのであれば是非就職したいと意欲の高い子どもが多いそう。マッチングした若者も、とても真面目で、コツコツ作業をするのが得意で、企業側の印象もとても良かったとのこと。入所中のインターンシップは、子どもたちが「自分たちを必要としてくれる企業がある」と気付く機会にもしていきたいそうです。

◆情には訴えず、あくまでもビジネス性・専門性・使命感を持って

マッチングの際、求人広告の営業や就職支援に携わってきた永岡さんならではのこだわりがあります。

「例えばバザーで、お情けで買った商品はほとんど使われることなくタンスに入れられてしまいますよね。同じように、情に訴えて就職した人は大切にされません。だから情に訴えることは絶対にしません。冷静にビジネスとして見ていくことも必要だと思います。」

またNPOや社会起業家など社会課題に取り組む組織が増え、社会貢献活動を志す若者も増えてきていますが、これからは、民間企業で5年くらい経験を積んだ上でスピナウトすることを勧めたいそう。

「私がなぜ事業を立ち上げられたかと言えば、人を紹介してお金を頂くという仕事をやってきたという強みがあったから。社会に出て経験を積んでからでないと、難解な問題はなかなか解けないと思います。社会人ボランティアやプロボノとしてお手伝いをして下さるのはもちろん大歓迎ですが、人は誰しも何かしらの使命を持って生まれてきているはず。そもそも“何のために社会で生きているのか、仕事をしているのか”、それを再考してみてほしいと思います。起業も一つの道ですが、民間企業で社会貢献していくのも一つの道ですからね。」

◆生まれた環境によらず、すべての子どもたちに公平なスタートの機会を

社会起業家の支援を行なっているiSB公共未来塾が開催したビジネスプランコンテストでグランプリに選ばれ、満額500万円の支援金の権利を獲得した永岡さん。

「スタートアップ時にまとまった資金があることで、事業にフルコミットできるのが嬉しいですね。有料で無理してやっていたかもしれない今年の案件も、無料で、丁寧に実績作りができます。起業を目指す人にぜひ知ってほしい事業です。」

様々な支援を受けて、今年9月の法人化を目指しているフェアスタートの企業理念は“次世代を担う子どもたちに公平な機会を創り出す”こと。

「悪いことをしたわけでもなく、たまたまの環境で施設に入っただけにも関わらず、公平な機会が与えられていないことに、疑問を突きつけたいんです。」

背景には、マイノリティを排除しようとする風潮があると思います。多様性を尊重し、人と違っていることも価値観として認められるようになるといいですね。」

